

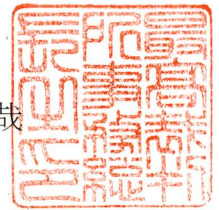
最高裁秘書第2230号

令和4年7月20日

林弘法律事務所

弁護士 山中理司 様

最高裁判所事務総長 堀田 眞 哉



司法行政文書開示通知書

5月16日付け（同月19日受付、第040147号）で申出のありました司法行政文書の開示について、下記のとおり開示することとしましたので通知します。

記

1 開示する司法行政文書の名称等

- (1) 渉外レポート第21号（片面で5枚）
- (2) 渉外レポート第22号（片面で4枚）

2 開示しないこととした部分とその理由

1の(1)及び(2)の各文書には、個人識別情報（氏名等）が記載されており、これらの情報は、行政機関情報公開法第5条第1号に定める不開示情報に相当することから、これらの情報が記載されている部分を開示しないこととした。

3 開示の実施方法

写しの送付

担当課 秘書課（文書室）電話03（4233）5240（直通）

渉外レポート INTERNATIONAL AFFAIRS REPORT

Vol.21

令和3年度外国司法専門研究会（司法研修所）

令和3年11月5日、司法研修所において、「令和3年度外国司法専門研究会」が行われ、ドイツ連邦憲法裁判所元長官で、現在はドイツ・フライブルク大学教授であるアンドレアス・フォスクーレ氏がオンラインで講演されました。日本全国から約170名の裁判官が参加しました。

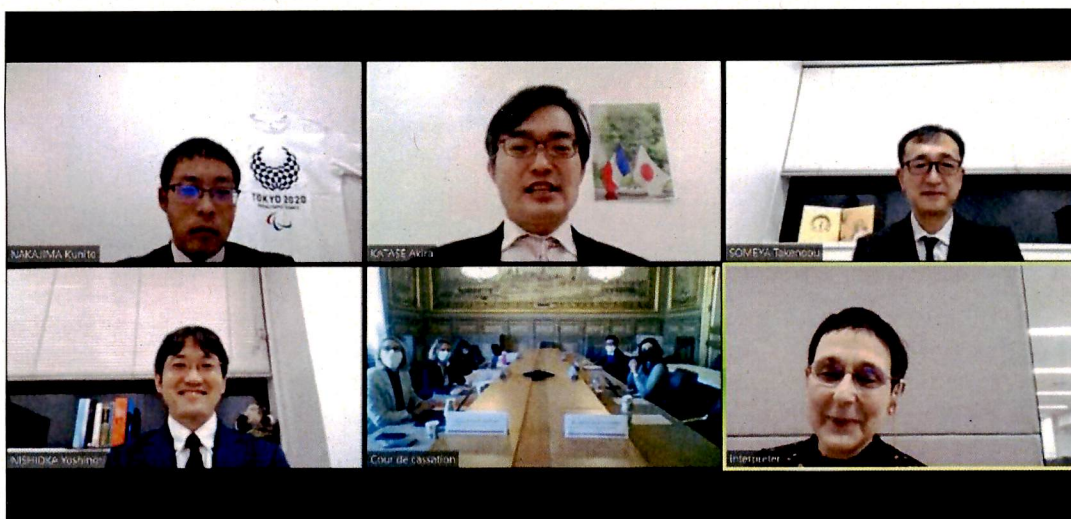


研究会は、「憲法の変遷とその限界」をテーマとして行われ、前半では、フォスクーレ教授が、12年間にわたりドイツ連邦憲法裁判所長官を務めた豊富な経験に基づき、時代とともに変容していく社会と憲法解釈の在り方等について講演を行いました。後半では、フォスクーレ教授と参加者との意見交換が行われ、参加者からは、憲法解釈と世論との関係、社会的な意識の変遷と多様な価値観のある領域における事情の考慮、憲法判断の前提となる立法事実の収集・認定といったトピックについて、フォスクーレ教授に対して質問がされ、活発な意見交換が行われました。



フランス破毀院とデジタル推進室との意見交換会

令和3年12月9日、フランス破毀院の実務担当者と最高裁デジタル推進室との間で意見交換会が行われました。この意見交換会は、同年6月11日に開かれた大谷長官とシャントル・アランス破毀院長とのオンライン司法会合における合意をふまえ、司法分野における日仏交流・関係強化の一環として実施されました。



本意見交換会は、裁判のデジタル化をテーマとして行われ、裁判のデジタル化とその運用上及び技術上の課題や判決のオープンデータ化について、日仏両国の実情が紹介されたほか、活発な意見交換が行われ、盛り上がりを見せました。

本意見交換会の模様については、全国各地の裁判官や裁判所職員の皆様にも視聴していただきましたが、視聴後、外国における裁判実務の実情に刺激を受けたといった声や、もっと日仏間の質疑応答を聞きたかった、今後もこのような意見交換会があればぜひ視聴したいなど、外国司法事情に関心を示す声を多数いただきました。

また、本意見交換会においては、デジタル推進室の協力を得ることで、専門業者によるITサポートなく実施しました。まだまだ運営や進行等に不十分な点があるかと思いますが、引き続き運営のノウハウを蓄積して、今後とも各裁判官及び裁判所職員の皆様に、広く海外の司法の実情を様々な方法で還元したいと考えております。ぜひ今後開催されるオンラインイベントにも気軽に御参加ください。



ドイツ学術交流会研修生インタビュー

令和3年10月から12月にかけて、ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学生・**■**さんが最高裁及び東京高地方裁判所において研修を受けました。研修初日に意気込みなどをお聞きしました。

Q：**■**さんは、2019年にドイツの司法試験に最終合格し、弁護士資格を取得していますが、日本の裁判所で研修を受けたいと思ったきっかけをお聞かせください。

A：来日前、ミュンヘンの法律事務所で働いていたときに、日本の依頼者に接する機会が多く、その悩みを理解するには日本の法律や制度を理解することが重要だと痛感したことがきっかけです。



笑顔でインタビューに答える**■**さん

Q：研修に何を期待しますか。

A：幅広く日本の司法制度を知りたいと考えています。また、日独の司法制度の共通点や相違点を見出して比較することで、ドイツの司法制度を新たな視点で見ることのできるのではと考えています。ドイツには日本のような戸籍制度はなく、「家」という概念がないので、日本の家族法について特に関心があります。

Q：来日後、日本とドイツとの違いを感じることはありましたか。

A：子どもの頃から日本には何度も来ているので、生活の面ではあまり違いを意識することはありませんでしたが、働く立場になってみると、メールの書き方や挨拶の仕方など、ビジネスマナーの面で違いを感じています。

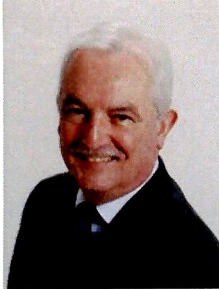
Q：**■**さんは日本語が非常に堪能で、ドイツ語も含め5か国語を身に付けていらっしゃるのですが、言語学習のこつはありますか。

A：いえいえ、まだ勉強が必要です。ただ、私の場合は、その言語の映画や、本、動画などを繰り返し見たり、ネイティブスピーカーの方に会ったら話しかけてみたりしました。その言語に触れる機会を積極的に増やし、可能ならネイティブスピーカーの友達を作るのがおすすめです。ちなみに、一番習得が難しかったのは、日本語でした。



■さんは12月末に研修を終えられ、「非常に充実した研修でした。研修を担当してくださった皆様、ありがとうございました。」とおっしゃっていました。

お知らせ オンラインイベントが実施されます



JNET ポータルにて募集要項掲載中

令和4年3月1日（火）午後5時30分～午後7時

外国法曹によるオンライン講演会

テーマ「後見制度における本人の尊重」

講師：デンゼル・ラッシュ氏（英国保護裁判所元上級判事）

JNET ポータルにて予告記事掲載中

（募集要項も追って掲載予定）

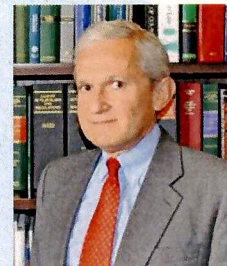
令和4年3月18日（金）午後6時～午後7時15分

外国法曹によるオンライン講演会

テーマ「デジタル化が進む英国司法の現在地と将来像

～挑戦の軌跡をたどる～」

講師：ジェフェリー・ボス氏
（英国王立裁判所記録長官兼控訴院民事部長）



© Crown Copyright
“New Master of the Rolls,
Sir Geoffrey Vos,
starts his appointment”

秘書課渉外室では、今後もオンラインによる講演会等を企画する予定です。
ぜひご注目ください！



“The Sun himself is weak when he first rises, and gathers strength and courage as the day gets on.”

— Charles Dickens

1月6日、東京は大雪が降り、最高裁も雪化粧しました。翌7日には朝から晴れ、まさに、ディケンズの言葉を思わせる一日でした。

このコラムでは、在外研究経験者による体験記をチラッと紹介します。

チラッと海外・・・

楽器の名前は…



東京地方裁判所裁判所書記官 柿本真紀

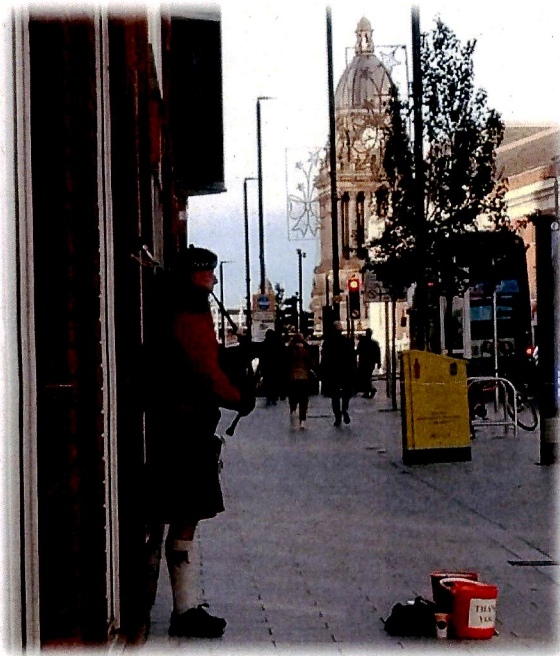
令和3年度 行政官長期在外研究員

リーズ大学派遣

10月のある朝、日課のランニングから帰ってくると、聞きなれない音色が聞こえてきた。音をたどっていくと、街角で、タータンチェックのキルトを着た男性が、3本のパイプが突き出た楽器を吹いていた。頬を大きく膨らませて息を吹き込むと、力強い音が響いてくる。

楽器の名前も分からないまましばらく見とれていたのだが、■■■■に写真を送ったところ、たちどころに謎が解けた。スコットランドのバグパイプでしょ、昔教科書で見たよ、という。日本のカンパンの缶にも描いてあると教えられて検索してみると、おなじみの缶には、まさしく先ほど見た楽器を吹く人物が描かれていた。

この男性はあちこちの街を回っているのか、時々しか姿を見せないののだが、彼が来ている時は、バグパイプの音色が部屋にいても聞こえてくる。



調べてみると、昔のスコットランドの戦いでは、奏者が陣頭でバグパイプを吹き、その奏者が倒れた時はすぐに別の兵士が代わって、途切れることなく演奏を続け、味方を鼓舞していたらしい。バグパイプの音がよく通るのももっともだ。

楽しませてもらっているお礼を込めて、男性の足元の缶に硬貨を入れたら、いつも難しい表情の彼が、演奏しながら微笑みかけてくれた。次はいつ来てくれるのか、毎朝ひそかに楽しみである。

次号の渉外レポートもお楽しみに！

渉外レポート INTERNATIONAL AFFAIRS REPORT

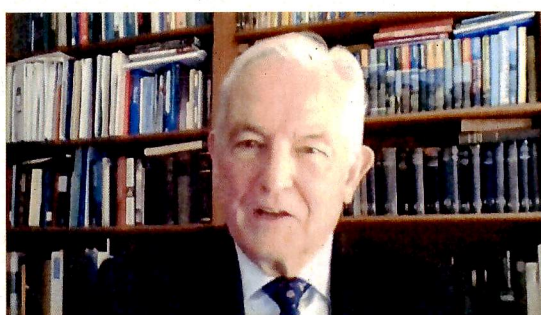
Vol.22

英国保護裁判所元上級判事オンライン講演会

令和4年3月1日、デンゼル・ラッシュ氏を講師に迎え、オンライン講演会を開催しました。ラッシュ氏は、後見事件を専門に扱う英国保護裁判所の上級判事として、長年にわたり後見分野の審理を担当された方です。

講演は「後見制度における本人の尊重」をテーマに行われ、ラッシュ氏は、裁判例や豊かな実務経験をもとに、英国における実情を時折ユーモアを交えながらお話し下さいました。講演後は、ロンドン大学バークベック校刑事・司法政策研究所（ICPR）上級研究員のカミリア・コン氏、裁判官、家庭裁判所調査官、裁判所書記官も加わり、質疑応答が行われました。英国における意思決定能力の有無に関する判断枠組み、本人のニーズの把握方法などのトピックについて活発な意見交換が行われました。

この講演会は、オンラインで、全国の100人以上の裁判官及び裁判所職員が聴講しました。「比較法的観点から、非常に多くの示唆をいただいた」「研究者の視点からのコメントを聞いたのもよかった」などの多くの好評をいただきました。



英国（イングランド・ウェールズ）記録長官オンライン講演会

令和4年3月18日、イングランド・ウェールズ記録長官であるジェフェリー・ヴォス卿を講師に迎え、オンライン講演会を行いました。この講演会は、日本の裁判所がデジタル化の検討を進める中で、英国の取組を参考にするために開催されたものです。

冒頭では、大谷直人最高裁長官が開会挨拶を行い、「日本のデジタル化の検討を進める上で、先んじてデジタル化を推進してきた他国の裁判所の取組を参考にすることはとても有効です。」と述べました。



講演会では、ジェフェリー・ヴォス記録長官が、イングランド・ウェールズ司法のデジタル化の軌跡及び今後の展望をテーマとして講演し、オンライン申立てや申立前ポータル、デジタル化における課題を紹介しました。続く質疑応答では、デジタル化後の裁判所の役割やAI技術の活用についても話題が及びました。

本講演会は、全国の裁判官や裁判所職員200名近くがオンラインで聴講し、英国（イングランド・ウェールズ）司法のIT化の取組についての理解を深めました。



お知らせ オンラインイベントが実施されます

令和4年9月16日（金） 午後6時～午後7時30分

外国法曹によるオンライン講演会 （追ってJNET ポータルにて募集要項を掲載予定）

テーマ 「ドイツ民事訴訟のデジタル化」

講師：ヴェルナー・リヒター氏 （独デュッセルドルフ高等地方裁判所所長）





マンスフィールド研修生インタビュー

令和4年2月21日から3月25日にかけて、第25期マンスフィールド研修員の[]さんが最高裁及び東京地裁（調停部・破産部）において研修を受けました。研修初日に意気込みなどをお聞きしました。

（マンスフィールド研修は、駐日米国大使も務めたマイク・マンスフィールドの名を冠した、日米両国間の実務的な政府間研修プログラムです。そのため、[]さんは、裁判所だけではなく各政府機関でも研修を受けています。）



笑顔でインタビューに答える []さん

Q：これまで来日されたことはありますか。日本についてのイメージは。

A：来日は、今回が初めてです。私も私の家族も、日本のゲームが大好きで、世代を超えて同じ遊びを経験しています。また、日本の食事は素晴らしいと感じています。私は、特にエビが好きで、来日後は、エビ餃子やエビの天ぷらを楽しみました。

Q：日本滞在中、アメリカと違うと感じたことは何かありますか。

A：新型コロナウイルス感染症をめぐる状況に関して、私がいたアメリカのワシントンD.C.では、テレワークが広く一般的でしたが、日本では、皆、マスクと体温測定、手の消毒をして、出勤し、レストランにも行くことが、大きな違いでした。

Q：裁判所での研修では、どのような経験をしてみたいですか。

A：私は、石油やガス田の倒産事件を多く扱っている弁護士ですので、倒産事件の手続を見学したいと思います。また、一般的な審理の流れについても知りたいです。また、日本には、刑事事件において、裁判官と裁判員が一緒に審理を行う裁判員制度があると学びましたが、アメリカでの陪審制度とは異なるので、どのように裁判官と裁判員が相互作用するのだろうと、好奇心がわきました。

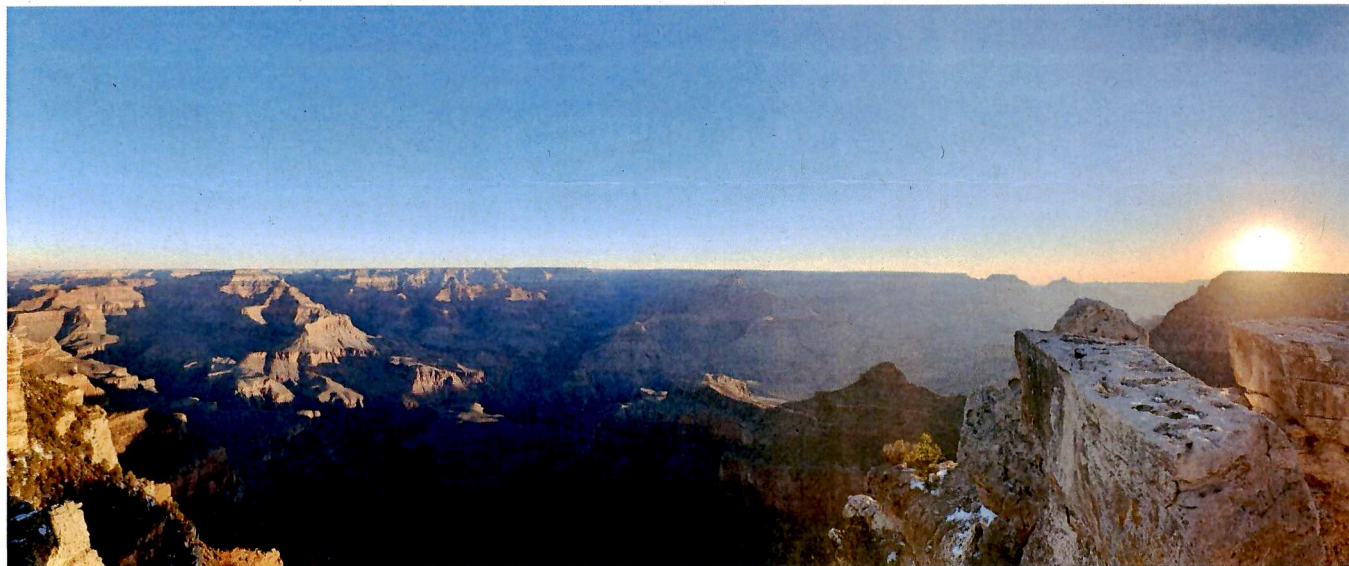
[]さんは、令和4年3月に研修を終えられ、「東京地裁では、両当事者の合意によって、裁判と調停を同じ裁判官が担当するという日本の裁判所制度を知り、大変興味深く感じました。」「合議を興味深く拝見しました。合議によって、裁判官たちは自分の法的専門知識や経験を共有し、互いに学び合い、裁判体のチームワークを促進し、判決に継続性を持たせることができると感じました。」「裁判員裁判の見学の予定を組んでくださり感謝します。とても興味深かったです。」と、お話しされました。

海外とラッ

世界の広さ



東京地方裁判所判事補 河本 薫
令和3年度判事補海外留学研究員
米国アリゾナ州フェニックス派遣



グランドキャニオン。州都フェニックスから350kmの旅。10月早朝の小さな展望台は混み合っていたが、それでもコロナ禍にあって例年より観光客は少ないようだ。「お先にどうぞ」と譲り合いながら切り立った崖の際まで進むと、眼下には悠久の歴史を刻む峡谷が遙か視界の果てまで広がり、地平の彼方から昇る朝陽を浴びて大気と共に刻一刻と色彩を変えてゆく。

世界は広い。海外旅行の経験もなかった私は、初めて目の当たりにするその威容に息を呑むばかりであった。

翌週、友人の紹介で、派遣先大学の日系人講師と食事に行くことに。フェニックスではあまり日本の方を見かけることはない。話が合うのでは、という友人の計らいに感謝しつつ約束の場所へ向かうと、相手はつい一週間前に展望台で順番を譲り合い、同じ朝陽を眺めた観光客であった。聞けばこちらに移住して数年になるが、あれが初の訪問とのこと。

世界は広い。そして、案外狭い。高く澄み渡る秋空の下、思わぬ巡り合わせに笑い合い、大きなピザに舌鼓を打った。

次回の渉外レポートもお楽しみに！